設

特242
898

898

近藤友四郎著

我が民族生命の本質

いざなぎ・いざなみ・對・アダム・エヴ

我が古典神代卷と聖書創世記の比較

錦旗會本部發行

特242
898

緒言——我が古事記と舊約書との比較批判に於ける一部

私は曾て「比較神話から觀た日本の優越性」と題して、西洋人の「舊約書」と我が「古事記」との比較批判を企てた——昭和二年十一月發行の「日本思想」第三卷第九號に掲載した——が、それは相當長文に渉るべきものゝ中の一篇「序論」であつたに拘はらず、私は當時その序論を發表した儘で、爾來今日まで數年間、その續きを完成せずに打過ごした。

翻つて、世界に民族又は種族の、多少とも各自の由來に關する、何等かの神話的傳說を持たぬ民族又は種族は無いであらう。最近日本に於いて神話傳說大系として出版されたものを見ても、菊大判六百頁乃至九百頁の書籍十八冊に及び、殆んどあらゆる民族種族のものが網羅されて居る。併し私の見る處では、それら世界諸種族に屬する全神話傳說の中で、多少とも纏まつた一個の「建國神話」を有するものに至つては、世界に唯だ二つに過ぎない。その一つは我が「古事記」——別に之が類書「日本書紀」を加へ——であつて、他の一つは希伯來神話——西洋人のバイブル舊約書である。

されば單なる學問的嗜好から言つても然りであるが、特に民族主義的意識の追ひ求むる處として、我々は世界に於けるこの二大古典を比較研究せずしては止み難く、そして之が比較研究の上に於いて、私は其處に少なくとも三大別して取扱はるべき範圍があると信ずる。第一は、兩古典の記述に渉る一切の題材に就いての比較批判であり。第二は、特にその建國物語に關する範圍の比較批判であり。第三は、又特にそうした建國や其他一切の事實由來の根蔕を爲せる人間的要素——民族生命(民族精神・民族魂)の比較批判である。私が曾て着手して而も中絶してあるものは即ちその第一に屬し、又今こゝに發表する處のものはその第三に屬する。そして私は更に曾てその第二に屬するものゝ一端を、同じく「日本思想」第二卷(大正十五年)第三號及び第四號に發表した。但しそれは極めて粗雜なもので、加ふるに印刷上の過誤などもあつた。そこで、之を要するに、私は既に今日まで一個の總括的比較批判と、二方面を有する特殊的比較批判の一つとを取扱つたに拘はらず、前述の如くその第一に屬するものは、一篇の序論を纏めたに過ぎず、又その第二に屬するものは甚だ粗雜なものであつたのに、茲に其等の完成や清算を措いて、謂ゆる第三に屬するものに着手した次第であるが、本篇は省みて遺憾なきつもり故、乞ふ諒とせられたい。

さて茲に私は、前記「比較神話から觀た日本の優越性」に就いて、その序論及び當時附記した全續篇の十標題を掲げ、以て總括的比較批判としてのその規模を知つて貰ひ、且つ之を本稿に對する參考に供する事とする。

序＝兩書の小類似を誇張して大差異を無視すべからず。

一＝多神教に似て非なる我が神々の本質と舊約書の神の複數原語。

二＝絶對神に對立する異質正反對の惡魔なる思想なき事。

三＝黄泉國の本質を異にして天國地獄なき事。

四＝祖神の地獄墜ち及び天國への復活なき事。

五＝神々の間に戰ひ無く征服被征服なき事。

六＝祖神に虚僞なく且つ創造的失敗なき事。

七＝原人に墮落なく人間は罪の子に非ざる事。

八＝救主を要せず修理固成の目標明確なる事。

跋＝書き方そのものに於いて見る優秀性。

今日の私としては、數年前の當時抱懷して居た處とは、向上に據る可なりの差があつて、例へばその條項は以上で凡そ盡し得るとした處で、內容は到底その各標題に表現した樣なものでは滿足が出來ない。兎も角も私は、近く必ず特に餘暇を求めて之が殘續稿の完成は固より、それ以前に書いた建國由來の比較批判の改訂修補をも實行する考へである。

猶ほ本篇の本論に入る前に一言を要するのは、曩に本篇と同じ性質のものを、これ又既に發表して居る事である。即ち昭和四年發行の「臨時增刊」に揭げた處の、前年秋愛知縣下に於ける八日間の講演筆記の一部で、同增刊の附錄第二十頁以下「日本精神の偉大性＝古事記とバイブルの比較」である。そこで、既にそれがあるのに、何故に本篇を綴るかと云へば、前記のそれは簡單な講演筆記でもあり、旁々、之も又極めて粗雜なものであつたからである。例へばそれは、引照した双方の古典の文句などにも完全を缺く點があつたり、殊に肝腎の批評そのものに於いて——說明も足らず條項

も不足で——不完全なものであつた。故に私は、其後更に充分の研究を遂げた結果を以て、兩古典（古事記及び創世記）の記述も之を的確に且つ充分に引照する事に依り、改めて本篇を執筆するに至つた次第である。

一、バイブルに於ける神と人間との最初の交渉＝創世記より

私は先づ、舊約書「創世記」第一章の劈頭、即ち「民族生命の源流」たる、神と人間との抑々の交渉發端から、本題に於いて取扱はんとする必要範圍の記述を拔萃する。そして、この拔萃に際して私は、途中の餘分な記事や繰返しは之を省略する。猶ほ餘事ながら、ついでに記して置くが、既に英譯本では印しがしてあるやうに、バイブルには後世の人の挿入文句があつて、忠實に讀む者には必ず領ける通り、それは大底は「取つて付けた」ものとして明らかに映する。猶又、普通の謂ゆる「正典バイブル」の外に、舊約にも新約にも別に「外典」又は「僞典」バイブルがあつて、而も其等の外典、僞典にこそ大に取るべきものが在るそうである。（神學生時代に此事を同志社の敎師に敎はり、又

その當時研究した高等批評學で記憶する。）

猶ほ今一つ附け加へて置きたいのは、邦文でも謂ゆる新舊「外典」の譯書は出版されたが、それには「民族生命の源流」を掬み得べき「創世記」のものが缺けて居る。又、ユダヤ人のユダヤ教に於ける經典（即ちタルムツド）は、普通の舊約書三十九卷の中の最初の五卷、即ち創世記、出埃及記、利未記、民數記、申命記の、普通とは内容の違つたもの（謂ゆる僞典）である。

創世記＝太初に神、天と地を造れり。(一) 地は形成なく曠空くして、暗黑その淵の面に在り、神の靈その水面を掩へり。(二) 神、光あれと言ひければ、光ありき。(三) 神、光を善しと見、光と暗とを分てり。(四) 神、光を晝と名づけ、暗を夜と名づけたり、かくて夕あり朝あり、これ第一日なり。(五) 神、言ひけるは、水の間に穹蒼ありて、水と水とを分つべしと。(六) 即ち穹蒼の上の水と下の水とを分ち、斯く成りぬ。(七) 神、穹蒼を天と名づく。(八) 夕あり朝あり、之れ第二日なり。(九) 神、言ひけるは、天の下の水は一所に集まりて、乾ける土現はるべしと、即ち斯く成りぬ。(九) 神、乾ける土を地と名づけ、水の寄り集まれるを海と名づけ、之を善しと見たり。(一〇) 神、言ひけるは、地は青草と種を生ずる野菜と夫々の類に從ひて果を結び且つ自ら種を持つ樹々を生ぜしむべしと。(一一) 即ち斯く成りぬ。神、之を善しと見、夕あり朝あり、これ第三日なり。(一二) 神、二つの光を造り、その大なる光に晝を司らしめ、その小なる光に夜を司らしめ、又別に星を造れり。神これらを天の大空に置きて地を照さしめ、晝と夜とを司らしめ、光と暗とを分たしめ、之を善しと見たり、夕あり朝あり、これ第四日なり。(一四—一九) 神、言ひけるは水には生物さはに生じ、鳥は天の大空の面、地の上に飛ぶべしと。(二〇) 即ち、大ひなる魚と、水にさはに生じて動く諸々の生物とを其類に從ひて造り、又羽翼ある諸々の鳥を其類に從ひて造り、之を善しと見、之を祝して言ひけるは、生めよ殖えよ、水に充てよ地に蕃えよと、(二二) 即ち斯く成りぬ。夕あり朝あり、これ第五日なり。(二三) 神、言ひけるは、地は生物を其類に從ひて出し、家畜と昆虫と他の獸とを其類に從ひて出すべしと、(二四) 即ち斯く成り、神これを善しと見たり。(二五) 神、言ひけるは、我等に象りて我等の像の如くに我等人間を造り、彼等をして海の魚と空の鳥と家畜と全地と地に匍ふ昆虫とを司配せしめんと、(二六) 即ち彼その像の如くに人間を造り、之を男と女とに造れり。(二七) 神、彼等に言ひけ

るは、生めよ殖えよ地に滿てよ、凡ての生物を治めよ。見よ我れ全地の面に在る諸ての種のなる草と實を結ぶ樹とを汝等に與ふ、そは汝等の糧たるべし。又諸ての獸と鳥と地に匍ふ物など凡て生命ある者には、我れ食物として諸ての青き草類を與ふと、即ち斯く成りぬ。神その造りたる諸ての物を見るに甚だ善かりき。夕あり朝あり、これ第六日なり。

斯く天と地とその詳衆は悉く成りぬ。神その造りたる業を竣へて、第七日にその綜ての業より休息せり。神この第七日を祝して之を聖めたり、そは創造の業を竣へて此日に休みたればなり。（註＝此處は改めて第二章に移つて居て、以上は既にその三節であるが、次の第四節から、神の名を始めてエホバ神と呼び出して居る。英譯本では、ゴツドが始めてロード・ゴツドとなる。何故かうなるか、そして邦譯者が何故その「主なる神」を「エホバ神」と書いたか。それは今の私の記憶に無い。それから此處に聊か繰返しと、且つ聊か矛盾の含蓄とがあるが、此處はそのまゝ採錄して行く。）

エホバ神、地と天とを造れる日に、その造られたる由來は之なり。野の諸ての灌木は未だ地に有らず、野の諸ての草蔬は未だ生ぜざりき。そはエホバ神、地に雨を降らせず、又その土地を耕やす人

無かりければなり。霧、地より上りて、土地の面を遍く潤ほしたり。エホバ神、土の塵を以て人間を造り、生命の息を彼の鼻に吹き入れたり、人即ち生ける靈となりぬ。エホバ神、エデンの東の方に園を設けて、其處にその造れる人間を置けり。エホバ神、觀るに美はしく食ふに善き各種の樹木を土地より生ぜしめ、且つ園の中央に生命の樹および善惡を知る智慧の樹を生ぜしむ。（四つの河の記事省略）かくてエホバ神、その人をエデンの園に置き、此處を理め且つ守らしむ。エホバ神、彼に命じて言ひけるは、園の凡ての樹の實は汝心の儘に食ふを得べし。されど善惡を知る智慧の樹の實は、汝これを食ふ可からず。汝これを肯かずして食はゞ、その日必ず死すべしと。エホバ神又言ひけるは、この人獨りなるは善からず、我れ彼に適する幇助者を造らんと。即ち（餘事二節省略＝此處に突然、その造られたる男の名をアダムと呼び始められて居る。）アダムを深く眠らしめ、眠りし時エホバ神その肋骨の一つを取り、肉を以て其處を塡塞たり。エホバ神、この肋骨を以て女を造り、之を男の許に連れ來れり。（餘事二節省略）こゝに男とその妻とは共に裸にて在りしが、彼等は之を愧ぢざりき。（之にて第二章は終る）

玆にエホバ神の造れる野の生物の中、蛇最も狡猾く、蛇、女に言ひけるは、神まことに汝等、園の諸ての樹の實は食ふべからずと言ひ玉へしや。(一) 女、蛇に言ひけるは、我等は園の樹の實は之を食ふ事を得。(二) されど園の中央なる樹の實は汝等これを食ふべからず、又これに捫はるべからず、反かば汝等は死すべしと神言ひ玉へり。(三) (註＝その「捫はるべからず」は前記の神の言葉には無かつた。斯うした事は澤山にある、之を纏めて他日「書き方」の批評に於いて取扱ふ。又、邦譯では「恐らくは死せん」となつて居るが、より以上原語に近いと言はれて居る英譯ではそんな意味の言葉は無い。そして前記の神の言葉は「必ず死せん」である。) 蛇、女に言ひけるは、汝等必ず死ぬる事なし。(四) 神は汝等が之を食ふ日に汝等の目開け、神の如くなりて善惡を知るに至るを知り玉へばなり。(五) 女、樹を見れば、食ふに善く、眼に美はしく、且つ賢き者となるべき望ましき樹なれば、即ちその實を取りて食ひ、又彼女と俱なる夫にも與へ、かくて彼も食ひたり。(六) かくて彼等の眼は共に開け、彼等はその裸體なりしを知り、爰に無花果樹の葉を寄せ綴りて彼等のエプロンを作れり。(七) 彼等は其日の凉しき頃に園を歩めるエホバ神の聲を聞き、即ちアダムと其妻、エホバ神の面前を避け、園の木々の間に身を隱せり。(八) エホバ神、アダムを呼びて言ひけるは、汝は何處に居るや。(九) 彼、言ひけるは、我れ園の中に汝の聲を聞き、裸體なるに依り懼れて身を匿せり。(一〇) エホバ神、言ひけるは、誰が汝に汝の裸體なるを告げしか？ 汝は我が食ふ勿れと命じたる樹の實を食ひしか？ (一一) アダム言ひけるは、汝が與へて我れと偕に在らしめし女、その樹の實を我れに與へたれば、我れ食へり。(一二) エホバ神、女に言ひけるは、汝が爲したる此事は何ぞや？ 女言ひけるは、蛇われを誘惑して我れ食へり。(一三) エホバ神、蛇に言ひけるは、汝これを爲したるに因り、汝は諸ての家畜と諸ての野獸とよりもまさりて呪はる。汝は一生の間腹ばひ行き、且つ塵芥を食ふべし。(一四) 又我れ汝と女との間、及び汝の苗裔と女の苗裔との間に怨恨を置かん。その怨恨は汝の頭を碎き、汝は又彼の踵を碎かん。(一五) 又、女に言ひけるは、我れ大ひに汝の懷姙の苦痛を增すべし、汝は苦しみて子を生むべく、又汝の望みは汝の夫に在るべく、汝の夫は汝を司配すべし。(一六) 更にアダムに言ひけるは、汝その妻の言葉を聽きて、我が汝に命じて食ふ可からずと言へる樹の實を食ひしに因り、大地(グラウンド)は汝の爲に呪はる。汝は一生の間苦しみ、苦しみに因りて食はざるべからず。(一七) 大地は又汝の爲にイバラとアザミとを生ずべく、汝は野の

草を食ふべし。(一八) 汝は額に汗してパンを食ひ、遂に汝は土に歸るべし。そは汝はその中より取られ、塵なれば塵に歸すべきなり。(一九) やがてアダム其妻の名をエヴと呼びぬ。これ彼女は凡ゆる生存者の母なればなり。(二〇) エホバ神、アダムと其妻との爲に皮衣を作りて、之を彼等に着せたり。(二一) エホバ神、言ひけるは、視よ、かの人、我等のひとりの如くなりて、善惡を知る。されば恐らくは、彼れ其手を伸べ、生命の樹の實をも取りて食ひ、限り無く生きん。(二二) かくてエホバ神、アダムをエデンの園より出で去らしめ、彼にその取りて造られたる土を耕やさしむ。(二三) 斯くエホバ神、人間を逐ひ出して、エデンの園の東に、ケルビムと凡ての道々に廻轉する焰の劍とを置き、以て生命の樹の道を守れり。(二四)

(第三章終り)

第一章の劈頭から第三章の結末まで、即ち「創世記」に於ける神と人間との抑々の交渉は以上の通りである。

二、我が古典「神代卷」に於ける同じく最初の交渉＝古事記より

次に我が「古事記」に就いて、之と對照上必要な記事を求むれば、言ふ迄も無く神代の卷に於ける最初の一部分である。之に就いて私は、皇民日常の讀本として、明治廿九年の出版にかゝる、井上賴文氏の校駐和綴本を坐右に置くけれども、今この和綴本から拔萃するに當つて、私はその神名を始め其他の固有名詞等、即ち漢字を主として書かれあるその使用文字をば、特に讀み易く解し易き意味本位の書き方に改めて――と言つて大した事は出來ないが――採錄しやうと思ふ。

天地の初發の時、高天原に成りませる神の名は、天之御中主神、高產靈神、神產靈神、この三柱の神は、みな獨り神成りまして、身を隱し給ひき。次に、國稚く、浮脂の如くに、くらげなす漂へる時に、葦芽の如く萌えあがる物に因りて成りませる神の名は、宇麻志葦芽比古遲神、次に天之常立神。この二柱の神も、獨り神成りまして、身を隱し給ひき。(上の件、五柱の神は、別天神。)次に成りませる神の名は、國之常立神。次に、豐雲野神。この二柱の神も、獨り神成りまして、身を隱し給ひき。次に成りませる神の名は、宇比地邇神、次に妹須比智邇神、次に、角杙神、次に妹活杙神、次に大斗能地神、次に妹大斗乃辨神、次に於母垂神、次に妹綾賢寧神、次にイザナギの尊、

次にイザナミの尊。（上の件、國之常立神より以下、イザナミの尊まで、並せて神世七代と申す。上の二柱は獨神にて各一代と申し、後の双びます十柱は、各二柱にて一代と申す。――（還藤生附註＝後の双びます十柱は、男神五柱と、女神五柱にて、普通これを悉く夫婦神の如くに解する者あれど、誤まれり。夫婦神は始めてイザナギ・イザナミの二柱のみ、他の四双八柱は決して夫婦の神々には非ず。）

茲に天津神の詔命もちて、イザナギの尊イザナミの尊、二柱の神に、この漂へる國を造り固め成せと宣命ちて、天努矛を賜ひて、言寄さし給ひき。依つて二柱の神、天浮橋に立たして、その努矛を指下して畫き給へば、鹽、こをろ〳〵と畫き鳴して引上げ給ふ時に、その矛の末より下垂る鹽、累積りて島と成る。これ、おのころ島なり。二柱の神、その島に天降りまして天の御柱を見立て、八尋殿を見立て給ひき。

茲にイザナギの尊、そのいもイザナミの尊に（餘事省略）國生み成さむと思ふが如何と宣り給へば、イザナミの尊、然善けむと答し給ひき。爰にイザナギの尊、然らば吾と汝とこの天の御柱を行廻ぐり逢ひて、みとのまぐはひ爲さんと宣り給ひき。斯く言ひちぎりて、乃ち、汝は右より廻り逢へ、吾は左より廻り逢はんと宣り給ひ、ちぎり了へて廻ります時に、先づイザナミの尊、あなにやし、えをとこをと言ひ給ひ、後にイザナギの尊、あなにやし、えをとめをと言ひ給ひき。おの〳〵言ひ了へ給ひて後に、イザナギの尊、そのいもに、女人を言先き立ちて、良はずと曰り給ひき。されど久美處におこして、子、水蛭子を生み給ひき。この子は、蘆船に入れて流し去てつ。次に淡島を生み給ひき、之も子の例には入らず。

茲に二柱の神、議り給ひつらく。今、吾が生めりし子、良はず、猶、天津神の御座に白すべしと宣り給ひて、即ち共に參上りて、天津神の詔命を請ひ給ひき。爰に天津神の命もちて、布斗麻邇にト へて詔り給ひつらく。女人を言先き立ちしに因りて良はず、亦還り降りて、改め言へと宣り給ひき。依つて爰に反り降りまして、更に天の御柱を先の如くに經廻ぐり給ひき。かくて先づイザナギの尊、あなにやし、えをとこをと言り玉ひ、後にイザナミの尊、あなにやし、えをとこをと言り玉ひき。（以下省略＝かくて改めて「ふさはしき」道により、修理固成の着手、國生み神生みの御業

が行はれる。）

先づ此處で豫め簡單な說明を要するのは、我が「古事記」に於ける若干の漢字、又その漢字に含まるゝ意義に就いてである。之に就いて私が爰に擧げるのは先づ三つである。第一は「神」なる稱號、第二は謂ゆる修理固成（つくりかためなす）の對象たる「國」なる文字、第三はその「修理固成」てふ文字である。先づ「神」に就いて玆に言はんとするのは、極めて簡單な一事である。それは、我が古典には上は唯一の天之御中主神から下は八百萬の神々に至るまで、悉く神と呼ばれてある——之を以て神代の卷と稱するものであらう——が、今これをバイブルとの對照に置いて、人類學的に取扱ふ場合には、謂ゆる「神代記」にも亦既に「人代記」があると言はねばならず、即ちイザナギ・イザナミの二柱は、人間としての我々の民族祖先であるとしなければならぬ。そして謂ゆる神學的に解する時、眞に神と云ふ神は唯だ一柱、即ち天之御中主神であつて、其他は凡て這の唯一神の顯現延長で無ければならぬ。それから、或る立脚地から、我が古典を一種の民族史と解して見る時は——左樣に解して差支なく、又特に左樣に解する事こそ日本的である——その天之御中主神も既に人間——我等の祖先である。

併し私は今爰では、我が古典を神話として取扱ひ、殊に之をバイブル創世紀との對照に於いて取扱ふのであるから、其處に當然、神學的に言ふ絕對の神と、そしてこの神から發生した（西洋では神に造られた）人類學上の祖先とを定める次第である。

次に、漂へる「國」及び之が「修理固成（つくりかためなす）」に就いて、私は直截にこの「國」を「世界」と解すべく、そしてその「修理固成」なる漢字は聊か妥當を缺き、つくりかためなすの固有語そのまゝこそ却つて至當であると爲す所以に就いて一言する。我が「古事記」の最初の外譯者(?)であらう（明治十五年に成された）英人チエムバアレン氏の英譯書に據れば、先づその「國」が Land と譯してある。然るに我が神道家や國學者の中に、之を恰も Country 又は Nasion 或は State であるかの如くに考へて居る向きがあるのは、遺憾至極の皮肉である。Land（ランド）！ それは世界であり、地球である。バイブル「創世紀」第一章第一節の「太初に神、天と地とを造れり」と云ふ其の天と地は、Heaven and Earth であつて、それから進んで「乾ける土現はる」の土は Lnad であり、神この乾ける土を「地と名づく」と云ふその地が即ち同じ Earth であるから、我が古典に於いて「國」なる漢字が用ゐられたものゝ實體

は、西洋人にも當然ランドとして受取られた處のもの、即ち世界であり、地球であらねばならぬ。猶この英譯書は、漢字の謂ゆる「修理固成」に就いても、より以上の眞に近い表現をして居る。即ち "to make, consolidate, and give birth" とあつて、そしてこの「漂へる世界」が "this drifting land" となつて居る。見よ、よさそうで物足らない「修理固成」の四字を補つて、より以上の表現をして居るではないか！ 創世紀の謂ゆる「成形なき」にも髣髴たる、くらげなす混沌の世界をば、確乎と造り、固め、之を立派なものとして仕上げ、又は生み成せとの譯意である。で、若し我々が今日我々の體得に基き、今日の世界に當嵌めて表現するならば、取りも直さず「世界の創造的革命及び完成」である。

次手に述べて置く。チエンバアレン氏の英譯は「一字一句も忽苟にしない嚴正な逐字譯として、頗る價値高き」ものだと云ふ評判であるが、最前問題にした「神」に就いても、創世記に於ける God の字を用ゐずに Deity の字が用ゐてあるのは、私としては矢張り適當であると思ふ。それは、本人が何う云ふ意嚮から用ゐたかは別として、我々の「神」は西洋人の云ふ God で無いからだ。そして、

西洋人が Deity と呼ぶ時には、それは自分等が God と呼ぶ神とは違ふが、併し矢張り等しい Divine 性にして Supreme 性の至高者で、Worship のオブゼクトだと解して呼ぶからである。猶ほ餘事ながら、チエムバアレン氏は、我が天之御中主神を the Deity Master—of—the—August—Centre—of—Heaven と譯して居る。

三、私が二十年來頓と顧みざりしバイブルと曾て試みた說明

愈々その比較批判を爲すに當つて、玆に改めて前掲拔萃の兩神話記事に就き、要旨を搔い摘んで見る必要がある。そして私は之に關して、曩に例の「臨時增刊」に掲載した講演の內容に、歐米人の民族性源流の盛られある這の「創世紀」の說明に就き、稍や粗略な點があつたのを記憶するので、玆にそれの修正を試みると同時に、新たに手落ちの無い完全な說明を加へ、之を以て愈々充實した比較批判に取掛るであらう。先づ曩の講演に於いては、私は次のやうに述べた。

バイブルに於けるエホバ神が先づ天地萬物を創造し、やがて人間の先祖であるアダムとエヴを造

つて、こゝに始めて神と人間との交渉場面が展開され、ヱホバ神が人間の先祖に與へた言葉、仕向けた事柄は、先づエデンの樂園に於いて「無爲に生存する」事と、それから、智慧の樹と生命の樹との、智慧の實と生命の實とを決して「喰べてはならぬ」と云ふ禁令とであつた云々。これに續けて猶ほ若干の説明を用ゐたが、修正を要するのは前記の内容に就いてである。

その講演に於いて試みた私の前記「創世記」に關する説明は、先程拔萃した實際の記事にスツカリ合致するものでは無かつた。實は私も過去に於いては、バイブルのどの卷も十回以上通讀して居ない卷は無い。新約書二十七卷は數十回、舊約書三十九卷も十數回、殊に劈頭の「創世記」や「詩篇」や「豫言の諸書」の如きは孰れも二三十回讀んで居る――のであるが、それはクリスチヤンだつた二十歳臺の學生時代で、その四五年間のクリスチヤン時代から十四五年間のソシアリスト、アナアキスト時代を經過して來る間、即ち其後の二十年ばかりは當然サツパリ御無沙汰して、バイブルの如き振り向いても見なかつた。そして私が改めてバイブルの事を思ひ浮べたのは、本誌「日本思想」の發行に着手した當時からで、且つ本當に之を久し振りに披いて見たのは、例の「比較神話から觀た日本の優越性」を執筆する時、即ち昭和二年である。そして私がそれとは別に、特に本稿に於いて述べやうとする趣旨、即ち曾て既に概約を講演で述べた内容に就いて、今更の如く大ひに感興を惹起したのは、故渥美勝氏との親交以來であつて、さてそれからは是非とも當の「創世記」を特に讀み直して見なければならぬのであつたが、遂に此度のこの拔萃まで實は全く之を繙く事はしはかつた次第である。されば私が曩にこの創世記の説明に於いて缺く處があつたのは、つまりこの改めて讀んで見て綿密を期する事をせなんだ結果である。

然らば曩の説明の何處に缺陷があつたか？　それは、謂ゆるヱホバ神と人間アダムとの間に開始された交渉に關して、私がいきなり創世記の第二章、即ち特に神と人間との交渉記を繰返したくだりに據つたからで、要するに、神が人間をエデンの樂園に「無爲に生存せしめる」事にした云々と、そして神が人間に與へた最初の言葉なるものに就いてである。バイブルには舊約書及び新約書とも多くの後世の書き加へが混ぢつて居り、其處には隨分内容の矛盾をも有するのであるが、舊約創世記に於ける人間對神の交渉記事も、その第一章と第二章とに二重に記されて居て、其處にも若干の

矛盾が含蓄されるのである。然し乍ら兎にも角にも、私がその第一章に於ける内容を其儘にして、直ちに第二章の記事内容に移つて之に據つた事は、結果は兎も角も其事だけの缺點である。が、但しその結果に就いて之を見る時に、それが殆んど何の過誤をも齎らして居ない事は、私が以下述べる處に依つて明らかに爲し得る事を斷言し得るのである。

前述の如く、この創世記の第一章と第二章とは、神人交渉の記事に於いて重複であり、同時に若干の矛盾を有する。先づ之を平凡に讀んで行くと、ヱホバ神がアダムに與へた最初の言葉は、第一章に在る樣である。即ち「神は自分の像に似せて人間男女を創造した」云々と、第一章第廿八節に記してあるのに、第二章に於いて更に、先づ男を作り更に女を作つたとある記事は重複である。そして、この第一章では、人間の食物として一切の植物性を與へて置き乍ら、第二章でこの植物性食物に制限のあるのは矛盾である。尤も之を、前のは一般原則で、後のは除外例だと見れば見れない事も無いが、要するにこの第一章に於ける、創造當日から六日目までの記事には、後世の書き入れがあると見なければならない。

今、そうした詮議を差し置いて、直ちにこの全記事に從つて解釋して行くとすれば、ヱホバ神が人間の先祖に與へた最初の言葉は、私が曩に講演で指摘した禁斷の言葉——第二章に於ける智慧の實と生命の實とに對する——では無くて、先づ一切の生物に對して與へたと同じ言葉——第一章の第廿八節に於ける——生めよ、殖えよ、地に滿てよ——である。處で、この言葉——神の人間に對する宣托——の含蓄する處のものは何であるか？　言ひ換えれば、この言葉は何か倫理的含蓄を持つか？　更に言ひ換えれば、神のこの言葉が、人間に對して、何等かの行動を促がし、又は仕事を求めて居るか？　それは、何人にも明瞭であらうやうに、ゼロである！　何ものも無い！　それは神の言葉と云ふよりも、寧ろ神の攝理（はたらき）——丁度その記事の前書きに「神、彼等を祝して」云々とあるその祝福それ自體であつて、之を享ける人間側に在つては、爲に何等の行動を要する條件も無く、何等の仕事を爲すべき必要も無き、單なる神みづからの人間に對する業、又は仕向けであり、或は又この業や仕向けの獨語（ひとりごと）である。即ち記して曰く「神、彼等を祝して彼等に言ひけるは、生めよ、殖えよ、地に滿てよ」と。これ恰も我々の間で、親がその幼兒の前途を祝福し且つ希望して「早く

大きくなつて偉え人になれよ」と言ふと一般、これを以て親が幼兒に何等の道德を求め又は任務を與ふるものでは無いのと同一である。(猶ほ私がその前後の二章には矛盾があると云ふのは、前章では、男と女とに一緒に言葉がかけられて居るのに、後章では男だけが先づエデンの園に置かれ、斯くて之に智慧の樹と生命の樹に對する禁斷の令が與へられ、やがて女を造つて之に添はされた事になつて居るからである。)

爰に於いてか、私が曩にエホバ神はアダム夫婦を「無爲にしてエデンの樂園に生存せしめ」云々と述べたのは、決して誤まつて居ない事が明らかである。言ひ換えれば、即ち創世記に於ける神人交渉の抑々は、直ちに之をその第二章に依つて知るべく、その第一章は此事では餘分の記事である。而もその第二章に就いて具さに之を見る時、紛ふ方なくエホバ神はアダム夫婦を何の仕事もせず無爲に生存すべく、花咲き鳥歌ひ美味豐かなるエデンの樂園に住まはせたのである。

四、西洋人の神は人間の先祖に「樂園に於ける無爲な生存」を與へた

併し私は更に進んで、周到な用意を以て一層正確を期する爲、爰にその第二章の記事にも、私の謂ゆる「無爲に生存」が動ともすると問題にされそうな點があるから、今一應その點に就いて研究を遂げて置かねばならぬ。前掲拔萃の如く、第二章第十五節に曰く「かくてユホバ神その人をエデンの園に置き、此處を理め且つ守らしむ」と。今これを邦語よりも比較的原語(ヘブライ語)に近いと言はれる英譯本で見ると、And the Lord God took the man, and put him into the garden of Eden to dress it and to keep it. となつて居る。この線を引ゐた處が、邦譯書で「理め且つ守らしむ」となつて居るのであつて、その譯語も結構であるが、併し之は其實モツト消極的な「其處を毀したり穢したりせぬ樣にさせる」意味に過ぎないので、此處の文句を取つてエホバ神はアダムにエデンの園の「番人的役目」を與へたものゝ樣に解釋したなら、それは誇張に過ぎた誤解である。なるほど一應は番人的役目があるやうにも受取れるが、今言つた通りそれは極めて消極的な內容で、更に言へば「坊や、チヤンとお留守番をしておいで」程度のもので、從つて之に對する坊やの役目以上のものでは無い。園の番人と云へば邦語の園丁、英語の Garden keeper, 或は Gerden dresser

若しくはGarden boyであるが、しかも決してそれが、園丁とか庭手とかガアデン・キーパアとかの、兎も角も一個の役目を意味する如きものでは無い。何故なれば、そのput him——to dress it and to keep it てふ文字が例へばdresser又はkeeperを意味するものゝ如くであつても、和譯して「理め且つ守るやうに」と云ふこの言葉が、アダムに對するエホバ神の言葉では無くて、唯だバイブル記者がエホバ神のアダムに對する仕向けとして書いて居るに過ぎないからだ。即ち拔萃で見る通り「かくてエホバ神、その人をエデンの園に置き、此處を理め且つ守らしむ」であつて、神がアダムに「汝この園を理め且つ守るべし」とも何とも言つたのでは無い。繰返して言ふ。之は創世記の筆者が、エホバ神がアダムをエデンの園に置いた理由を左様に忖度して斯くは叙し、又は忖度したものの如くに斯くは理由づけたに過ぎない。そしてその筆者は更に進んで、今度は愈々本當にエホバ神のアダムに對する命令（オーダー）の言葉を、そのまゝ命令の言葉として叙して居るのである。即ち次の第十八節に曰く「エホバ神、之なる人に言ひけるは、園の凡ての樹の實は汝心の儘に食ふを得、されど善惡を知る智慧の樹の實は食ふべからず。汝これを肯かずして食はゞ、その日必ず死すべし」と。

之が西洋人の謂ゆる「人間の先祖」アダムに對する、創造者であり唯一者である處の神の、最初に與へた「命令」の言葉であつた。即ち先づ彼をエデンの樂園に、何の爲す事も無く居らしめて、而して後與へた禁令の言葉である。

斯く仔細に考證を加へて見ると、私の曩日に於ける講演——「西洋の神が最初に人間に仕向けた事柄と言ひ渡した言葉とは、エデンの樂園に「無爲にして生存する」事と、智慧の樹の實を『喰べてはならぬ』と云ふ禁令とであつた」云々——は、正しい說明であつた事が分る。玆に改めて言ふ。私の見解に於いて、その「無爲に生存せしむ」は、一方これと比較對象に置く處の我が「古事記」に於ける、イザナギ・イザナミの二柱に對する天津神の命令——即ち使命（みこと）賦與（さづけ）——に對照する時、其處には雲泥の差とも云ふべき差異があつて、左様に解すべき所以が一際鮮明を致して來るのである。

然り、西洋人の云ふ人類の先祖アダムは先づ、花咲き鳥歌ひ美味豐かなるパラダイス、即ちエデンの「樂園」に、何等の日常勤務すらも無く、全く「無爲に」生存すべく遇置せられ、やがて最初の言葉を以て事新らしく、一個の「禁令」が與へられたのであつた。然るに彼れアダムは、間も無くその

適する助者としての妻を與へられ、彼女をエヴと名付ける（近頃これをイヴと讀む人が多い樣で、文字は英語のEveであるが、邦語のバイブルにもエバと譯してある位だから、私は之をエヴとして置く）前に彼はこの無爲な生活裡の一日、彼女と共にその禁斷を破つて罪人となつた。之が耶蘇敎で云ふ處の原罪、オリヂナル・シンである。扨この罪惡を犯して、之を彼等は悔ゆる容子も無く、只々エホバの怒りを怖れる處から、共に園の樹蔭に身を隱した。併し萬能の神の眼を瀆み得べくも無く、エホバは忽ち彼等を呼出して容赦なく犯罪を責め、且つ直ちに刑罰として、男アダムには「額に汗の勞苦を以て生活」すべき事を、女エヴには「お產の時に苦しむ」べき事を、そして人間を罪に誘つた蛇には「塵を喰つて腹匍ひ歩き、人間に呪はる」べき事を宣告したのみならず、特にアダムとエヴの原人夫婦は之をエデンの樂園から放逐し、且つ彼等に對して殘る處の「生命の樹」を守るべく園の東にケルビム及びその八方の道々を廻轉する焰の劍を置いたと云ふ、之が拔萃した「創世記」記事の要領である。（ケルビムとは何であつたか？　その昔確かに敎はつたのだが、すつかり忘れて記憶を呼び起せない。乞ふ聖書辭典を見られん事を！）

特記＝舊約書と新約書とから成る西洋人の「聖書」は、この「創世記」だけでも五十章あつて、それが邦語の七百字づめ九十餘頁に涉つて居るから、これだけでも我が「古事記」全文の半ば以上、六七割にも相當するであらう。然るに「舊約書」全部ではこの創世記以下三十九卷を有し、前記の字詰で千六百餘頁に達する。曾て倫敦タイムスであつたか、それともレヴュー・オヴ・レヴュースであつたかが、歐羅巴の名士に向つて、世界一の大文學書は何であるかを問ふた時、之に對して多數を占めた答へが、ホーリイ・バイブルであつたと云ふ。成程それは世界一の大文學書であらう。實際それは素破らしい記錄である。處で、それの謂ゆる民族生命の源流を含蓄する「創世記」は、之を我が小きな一卷「古事記」の中の一小部分たる神代の卷に比して、果してその大きな大根の價値如何、我々は進んで愈々その眞價を見究めぬばならぬ。

五、私は故人渥美勝氏に感謝すると同時に同氏の解釋を取捨する

爰で今一度我が古典神代卷に立戻つて、之も要領を掻い摘む必要がある。前揭拔萃の通り、我が

神代卷に在つては、先づ天地の初發に(從つて天地と共に)おのづから「成りませる」神々の中の中心者が、いきなり(その神々の中から生まれた)祖先人夫婦に對して「このくらげなす漂へる世界を造り固めて、之を立派に仕上げよ」と云ふ「使命」を與へ、その用具ともして天努矛を賜はつた。乃ちイザナギ・イザナミの夫婦二柱は、その使命を畏み奉じて、神の世界から人間の世界へ天降り、先づ其處に天の御柱を建て、八尋殿を建て、この八尋殿に於いて手始めの子生みに從事する。(例の講演筆記に「宮柱太しく建て」としてあるのは、故渥美氏の用語にツイかぶれて居た私の、之も古典を讀み直さなかつた小過である。)

即ち天の御柱を中心に、男性は左から、女性は右から、互ひに廻り逢ふ事に依つて行はれる。さて双方から廻つて相會した時、ふと女性の方から先に發言する。と、男性の方は之を耳にして「之は屹度間違つて居る」と感付いたが、併しはづみを承けて答への言葉を交へる。やがて子が生まれた。が、見れば不完全極まる水蛭子であつたから、直ちに蘆舟に入れて流される。續いて生まれた淡島も言はゞ不毛の地とでも云ふべきか、物の役には立たぬものらしく、之も捨て去られる。と、男性の方では忽ちその當時直感してあつた事を想ひ起して、この失敗は發言順序の妥當を缺いた事に基因するであらう、汝は如何に思ふやと問へば、女性も、げにこそ然らめとの答ひであつた。そこで二柱は、急ぎ天津神の御許に參じて、失敗を陳謝し、且つ伺ひを立てると、それは「汝等の申する如く、女言先たづるは良はず」とあつた。二柱は仰せ畏みて神前を辭し、八尋殿に降つて再び左右から御柱を廻り、今度は男性の方から先きに發言して、玆に「漂へる世界を造り固め成す」御業は、始めて見事に進行する事となる。——以上が拔萃した我が神代卷の要領である。

さて愈々その比較批判の段になつて、猶ほ豫め少しく述べて置きたいのは、故渥美勝氏に就いてである。私がそも〳〵生前の渥美氏に敬服したのは、氏が殆んど學者や思想家の誰もが曾て觸れなかつたであらう處の、この古典比較を試みて、之を氏の口調を借りて言へば「實に素破らしい」見事な日本生命を把握し、表現し得た唯一者であつたからだ。氏は單に謂ゆる神話傳說としての成文古典に民族の源流生命を求めた丈では無く、又實に俚俗口傳のお伽話の類からも之を探り出して居た渥美氏自身その晩年に「俺はもうあれは廢めた」との事であつたが、あれ即ち桃太郎主義の如きも、

單り渥美氏に依つてのみ把握され、殊に二十年來絶えず街頭に立つてまで宣傳された處の、我が尊い固有生命の解釋であると思ふ。氏には猶ほ他に羅馬の建國傳說（之は書物としては無いらしく、最近の大系にも無い）を對照題材にした得意の一講演內容があり、又別に全く創作としての比喩的物語を骨子としての日本生命論もあつたが、其中で渥美氏自身も一番の自信を以て支持したらしく私などにも最高のものと思はれたのは、この古典比較に據る固有民族生命觀であつた。

曾て一度は熱心な青年クリスチヤンであつて、傳道者たらんとして神學校にも學び、しかもその數年間に何時しか一種のクリスチヤンであり乍ら同時にダアヰニストでもあるに至り、やがて科學萬能信者と化して、聖書及び敎會の信仰から取るべきものは、唯だヤソ基督の人格のみと云ふ信念に歸着して居た時、端なくもソシアリズム、コムミユニズムの演說を聽き、當時の極めて少ない冊子を讀み、遂にマルクス、エンゲルスの徒、又はバクーニン、クロポトキンの徒となつて、コスモポリタンとして漂ふ事十數年、西洋思想に耽溺し盡した末、漸く己が精神的故鄕に立歸つた私は、日本思想創刊第一號に「古事記とバイブルと民族的恥辱」なる一文を揭げた樣な次第で、この民族史的寶典の比較と云ふ事は、私に取つて謂ゆる板に就いた處のものである。併し私が特にこの比較に依つて、著るしく我が固有民族生命の優秀偉大を叫ぶに至つた動機は、この叫びに於いて先輩たる故渥美勝氏の、その美事な把握と深刻な表現とに負ふものである。そして渥美氏のこの古典比較に據る力說點は、凡そ左の三點であつた。その一は彼れの「生存そのものゝ價値づけ」に對する我れの「使命に生くる生存にのみ意義を認める」事の優秀、その二は從つて彼れの「享樂主義」に對する我れの「使命主義」の偉大、その三は斯かる固有生命に基く彼我民族の哲學的、宗敎的、倫理的諸相に於ける價値の劣對優であつた。私は今、この故人に負ふ處の尠からざる事を玆に明記して、之を讀者諸士に披瀝すると共に、又之を改めて故人の靈に告謝するものである。

供し私は、曩の講演に於いても既に五つの項目を擧げて、謂ゆる我が「優秀點」を述べたやうに、私の見る處は二三にして盡きないのみならず、その見る見方、即ち說明內容と及び力說點とに於いて、渥美氏とは可なり違つて居る。そして本稿に於いては更に曩日とは違ひ、項目も多く且つ說明も亦更に大ひに違ふ。之は聊かおこがましい申分ではあるが、私の其後に於ける努力精進の結果で

ある。私と渥美氏との相違の如何なるものであるかは、頓て列擧する內容に依つて會得されるであらうが、玆に一つ小さな見本を示すとすれば、渥美氏が我が古典に基いて、戀愛基礎結婚論をされた如き、私の取らざる處である。尤も、氏は私の之が矛盾指摘を以ての注意を容れて、生前それを撤回する旨を述べたのであつた。

六、先づ主として人生觀に於ける彼我の民族生命を評價す

玆に愈々その比較批判に入つて、本篇に於ける目的を達成する事とする。

第一＝バイブルを以て尊貴侵すべからざる共通の神の御書（みふみ）「聖書」として奉戴して居る西洋諸國民に在つては、無爲にして樂園に生存するのを欲求とする。彼等は單に極めて消極的な園丁、庭番としての事實は勿論その名義すらも欲せず、全く「無爲」にそして「樂園」に生存するのを欲求とする。その樂園を描いたのは無爲を欲するからであつて、無爲を欲するが故に樂園を描いたのである。即ち假に全くの無爲では無く、一種の庭番的役目を持つとしても、その只管に欲する處のものは「樂」であり、從つて限りなく厭ふ處のものは「苦」であるから、この消極及び積極の欲求は、之と矛盾し又は之に抵觸するのを必然とする一切の義務的負擔に甘んずる筈は無く、從つて假定された如何なる消極的役目も彼等には遂に閑却され、放棄されざるを得ず、結局、役目と云ふが如き概念は彼等の生命に取つて全く無意義のものであり、彼等は全くの無爲に於ける樂園生活の欲求者たるに外ならない。そこに彼等今日のパン第一主義、戀愛至上主義、享樂追求の人生觀が根ざして居る。そして又そこに彼等今日の個人的功利主義、物慾的現實主義が根據を持つ。かくて彼等は、肉體と物質と現實とに執着し、而もこの執着それ自體から、時に矛盾にもその肉體と物質と現實との呪詛に傾くを免かれない。

然るに我等に在つてはその固有生命を全く異にし、樂園も追求謳歌しなければ、之とは反對の苦界も亦全く眼中に置いて無い。そして我等に於いては、肉體即生命、物質即精神、現實即未來である。從つてその二元的に見て之を引離した一方に對するそうした執着を持たないと同時に、呪詛も亦更に抱かない。故に我等にはパン第一でなく、戀愛至上でなく、而して我等の生命は樂を求め苦

を避けるが如き事から全く超越して居るのみならず、優に是等を克服して居るのである。

第二＝無爲と云ふ事と享樂と云ふ事とを別箇にして見る時、爰に彼等の固有生命は次の如くになる。かの、エホバからアダムへの言葉では無かつたから、固より假定的な極めて消極的性質のもの即ち一種の番人と云ふもの以外には、何等の積極的な神命に基く役目とては無く、花咲き鳥歌ひ美味豐かなる樂園に置かれた彼等に取つては、享樂を以て第一義とするその生命が、更に無爲を以て第二義とする生命である。言ひ換えれば、彼等に取つては少なくとも、生存そのものに意義が有るのである。たゞ〳〵生きる其事に、意義も價値も有るのである。例へば我等の生命から觀て如何に醜い生存であつても、どんなに恥晒しの生活であつても、彼等の民族生命に取つては豪も醜い生活でなく、恥晒しの存在でなく、それでも猶且つ「死」よりは優る處の、それ自身 All right！ で是認し得る生存なのである。然り、どんな生き方、それは問題でなく、たゞ〳〵生めよ殖えよ地に滿てよの儘に生存すれば足る。それが彼等の生命、即ち生存そのものに意義を認め、之に價値ありとする民族生命である。但し拔萃に於いて見られる如く、創世記の記事には今一つ、彼等の人生觀が今少し高級のものであるかの如く、即ち私の批評も强がち當つて居ないかに思はせる文句が、問題の第一章にある。曰く「神言ひけるは、我儕に象りて我儕の像の如く人間を造り、彼等をして海の魚と空の鳥と家畜と全地と地に匍ふ昆虫とを司配せしめん」云々（第廿六節）と。そこで辯解を爲す者は「此處に原則がある、即ち人間は天地萬物の上に在るその司配者だ」と云ふかも知れぬ。が、叙上の如く創世記歴卷の有意義文字たる部分が明らかに示す處では、その謂ゆる上に在つて司配する云々は、その欲求たる享樂第一、無爲第二の生存そのものに於いて、人間が萬物の上に在つて優先權を有すとの意義を出づるものではない。言ひ換えれば、天地萬物は皆悉く、人間の享樂上の功利の爲に存在し、人間の無爲な樂園生活に奉仕すべく存在し、即ち人間に取つて奴隷的な被司配者である、と云ふ意味に過ぎない。されば見よ、歐米のバイブル國民が齎らした社會諸科學の骨髓は、如何に人間は禽獸虫魚と共通點を有するかの研究に在つて、決して如何に人間は禽獸虫魚と異なるかの研究には無く、その研究は强ひて之を閑却し、寧ろ輕蔑して居るでは無いか！ 即ち生めよ殖えよ地に滿てよ、而して禽獸虫魚の上に立ち、一切を下積に置き、以て無爲な樂園生活を充實せよ、

之が彼等の信條である。其處に彼等今日の現實的生存慾に基く獸的元氣と、そして死を是れ怖るゝに據る自殺罪惡觀との根據が在る。そして又そこに彼等をして永久に、日本人我等の「切腹」を解し得しめざる所以が伏在する。

然るに我等に在つては、生存そのものには何等の價値も無く、一の使命に生くる生存に於いてのみ始めて意義ありとし、之にのみ價値づけをするのである。されば我等に於いては、謂ゆる自殺を以て崇高超道德と爲す處の、積極的及び消極的なる二つの場合がある。その一は即ち「使命遂行上必要なる場合」であり、その二は即ち「生存が使命の前に愧づべき場合」である。この二つの場合に於いて日本人我等は、此事それ自身を又一の使命として、即ち使命者の本分に於ける實踐躬行として、潔よく死に就く——自刄し切腹する。更に又この原理から、我が日本生命に取つては、他殺＝他人を殺す事すらも、それ自體を直ちに罪惡視するものではない。未だ舶來思想の混入が無かつた頃に、謂ゆる仇討の公許されて居たのは、この生命の發露の一端であつた。かの、古來當然、私人間に於いてする仇討の公認なき西洋に於いて、謂ゆる或る犯罪者を死刑に處する法律とその事實とがあるのは、彼等が固有せる民族性の醜い矛盾曝露である。バイブル道德の第一條たる「單なる殺す勿れ」を守る時、殺人犯と雖も之を殺す事が出來ない筈である。然るに我等の固有生命は、彼等の如き「單なる殺す勿れ」を道德とせぬ。されば殺人犯其他の重罪者を刑殺するのも、それが前述の二つの場合の孰れかに該當するからである。從つてその刑に就く本人も、若し眞に我が本來の生命者であるならば、殺されると云ふ意識は無く、敢てその本分に從ひ面目を完ふせんが爲、自ら死するの覺悟を有する筈である。即ち、由來刑死の手を俟たずに自刄を遂ぐる者の多かつたのは、之が爲であり、そして世界に唯だ我が日本のみの尊き事實として、かの「切腹被仰付」の制度が在つたのも、又實に此理に基く。然るに生存そのものに意義づけて、生めよ殖えよをモットーとし、ひたすら生に執着し乍らも、その原則が含蓄する享樂第一、無爲第二の必然的奔放から、矛盾にも時に生の呪詛に陷る彼等は、しかも猶ほ死は之を限り無く恐怖する處で、爰に產兒制限と云ふ樣な事を默認し公行するに至つたが、生にも徒らなる執着なく、死をも無意味には恐怖せず、從つて敢て享樂を追ひ求めず、苦痛も强がち厭み避けず、たゞ奉ずる處の使命遂行を目標に生くる我等の民族生命

は、水蛭子や淡島ならずしては流す事を許さず、故に彼等の矛盾を憫れむと同時に、その矛盾行爲をこそ之を罪惡視するのである。

第三＝享樂生活を第一義とし、無爲生存を第二義とし、畢竟するに生存そのものを意義づけ、之に價値を認める創世記のバイブル民族は、その必然的道程として、人生の「勞働」なるものを以て、前記の生存本義に悖る厭ふべき苦役と視、且これを人類に對して天帝の與へたる刑罰なりと見た。勞働問題の發端は既に西暦紀元以前に在り、勞働爭議の淵源は即ちバイブルに在る。かの「勞働は神聖なり」など稱するのは、後に搾取者が被搾取者に對してのみ用ふる處の、新約書惡用の僞善道德に外ならない。即ち勞働天罰觀を以て本來性とする彼等が、各自この苦役を呪詛し回避すると同時に、一方享樂を憧憬し追求して相爭ひ、遂に弱肉强食の修羅場を演出し、やがて征服被征服對立のうしはぎ(司配)組織の樹立を見、爰に端なくも其の僞善道德律即ち「勞働は神聖なり」の惡說教が始められたのであつた。勞働を以て天罰の苦役と見る、何たる低級生命であらう！　而して階級利己の爲に旋て矛盾にも、勞働は神聖なりと云ふ、何たる劣惡生命であらう！

翻つて我等――單に生存そのものには何等の意義も認めずして、唯だ天の惠み神の賜物としての使命に生くる生存に於いてのみ意義を認め、價値ありとする我等の固有生命に在つては、勞働が勞苦であつても悉く之を我がものとする。乃ち、使命が「我がもの」なれば、勞苦は之に卽する「我がもの」なのである。くちげなす慄へる世界を作り固めて、之を見事に仕上げる事を使命とし、この「使命」を敢て天惠神賦の民族的特典ともして擔ふ使命者――使命の自覺遂行者――に取つては、その民族魂(生命)構成の要素として、豫め使命即勞苦てふ言擧げせざる生ける概念を有し、之を直覺的前提條件として生存する主觀者なるが故に、謂ゆる勞苦は決して己が使命生活と懸隔し又は分離せる客觀的事實では無く、假に之を客觀的事實として遇する場合があれば、當然これをその直覺裡に歡迎するのである。然り、勞苦を歡迎するのである。言ひ換えれば、勞苦は之を呪ひ避けるどころか、使命遂行上本懷のものとして遇し、之を斯く遇する處に使命の遂行あり、使命の遂行者なるが故に之を本懷として遇する。則ち、生の苦しみ、死の苦しみよ、遺憾なく我れに來れよかしと、あらゆる勞苦をその最後の一と擔ひまで擔ひ拔かずしては止み難きもの、是れ我等の民族生命であ

る。見事なる哉、この生命！　素晴らしい哉、この固有性！　適ばれなる哉、この民族魂！　されば又從つて日本人我等には、勞働は神聖なり云々は、全く無意味なる寢語である！　大なる使命に生くる我等に取り、勞働も休息も飲食も睡眠も、悉く神聖ならざるは無く、さればこそ特に神聖なりと稱すべき筈の何ものも無く、若し神聖と稱して可なるものがあるとすれば、それは「使命に生くる生存」の生命そのものと、その生命の顯現に屬する一切の動きとである。あゝ尊き哉、何たる卓越、古事記に表現を持つ我等の源流民族魂！

爰に今一つ言つて置く必要のあるのは、更に新らしい言葉「働かざる者は喰ふべからず」云々に就いてである。之は强がち僞善道德律では無い。が、我等の生命から觀て又毫も讃仰に値する內容のものでは無い。それは、階級利己に基く搾取對被搾取の惡說教に對して生み出された處の、從つて依然たるその本來性の是認——勞働苦役觀の是認——を反映せしめて餘りある處の、等しく偏重的な獅嚙付の低級お題目に過ぎない。手ッ取り早く言ふならば、働き度くなく出來て居るから、働く事を力說しなければならぬのである。働く事を生存の使命に即する本義と爲す者に取つては、敢て働くべき事の言擧げを必要とせぬ。故にこの「働かざる者は喰ふべからず」は、無爲享樂を求むる生命の民族に取つては、大事な强制律であるけれども、使命觀の民族我等に取つては、全く無意味である。そして一個の家族體である我等の集團生活に在つては、その使命觀に應はしい家族體自然の、まつろひ生命から、謂ゆる「働かざる者」も猶ほ「喰ふべく」敢て仕向けるものである。卽ち一大家族の血を分けた家の子郎黨が特に　大御親たる上御一人とその宗家御一族は勿論、家の子お互ひの間に於ける老長、幼少、婦女など——衰退と未成熟とに依る能力不足者又は弱者——或は不具者、癈疾者、それから平時と戰爭との偉功殊勳者、附け加へて若干の各種客人——是等に對して發露する處のまつろひ精神が、特に敬ひ、ねぎらひ、恤り、もてなしを是等に捧げ又は與へずしては止み難く、敢て其等に「働かざらん」事を要望し、謂ゆる「生活の安定」を通り越した「一種の贅澤」までも提供すべく、之が爲め健かな働き盛りの側が打揃つて、それ〴〵三人前も五人前も働く事を以て會心事と爲すのである。そして若し必要ならば、この民族生命は言ふ「まつろはざる者は喰ふべからず斷じて家の子我等の間に生を偷むべからず！」と。

以上の三項目は、特に纒まつた人生觀の比較批判であり、且之に依つて把握した我が優秀民族性の中樞的本質である。以下項を改めて取扱ふ處にも、猶ほ人生觀に屬するものは尠なからず在るけれども、其等は寧ろ人生に於ける個々の問題、即ち倫理、宗教、其他である。そして其處には神觀或は有神無神論、又は宗教心など、謂ゆる宗教哲學乃至宇宙哲學に關する範圍のものも含蓄され、其等の細說は恐らく兩古典の一般的比較批判の職に讓るべきであらうが、併し謂ふ處の民族生命の一括した把握に必要と認められる範圍に於いて、之を簡潔に取扱ふ心算である。

七、人類觀・神觀＝有神無神論・宗教觀・宗教心に於ける優劣

第四＝人間に對して或る行動を求め、從つて其處に倫理的基範の發生すべき、神から最初に與へられた意義ある命令として、アダムはエホバからエデンの園の中央なる智慧の實を「喰べてはならぬ」と云ふ禁令を與へられた。（曩に私が智慧の實と生命の實と兩方に對する禁斷として擧げたのは、創世記には書いて無い事であつた。）之は何を意味するか、即ち彼等自身の低級人類觀を物語るものである。彼等は自ら人間の價値を安値に見積り、その地位を低く地位づけた。凡そ命令なるものには使令と禁令との二種が含まれる。使令に堪ゆる者はより高級であり、之に堪えず又は應はしからざる者には、必然的に禁令が與へられ、從つてその低級なる事を示す。バイブル國民は乃ち、彼等自身を視るに、禁令を蒙るにしか値せざる低劣觀を以てした。「何々の事をしてはならぬ」と禁ぜられて居る惡戲盛りの幼兒よりも、「斯々の事をせよ」と命ぜられ、何等かの使命を擔ふに足る物心ついた少年、青年の方が、ずつと高級であると云ふ哲理は、彼等の原流生命として固有せざる處で、その天賦とする民族生命は、shall to beに値せずして、shall not to beの餘儀なきものであつた。故に彼等の價値觀は、例へば爲すべき事の何であるかを示して之を爲さしめんが爲に存在する文教官よりも、禁令を與へ且これが違犯處分の爲に存在する警察官の方が、より高級にして有價値であり、人類の誇りであると爲すもの。

然るに我等に在つては、直ちに天津神から「爲すべき」大なる使命を與へられた。之を神の立場から見る時は、何等かの禁令などを與へるには餘りに勿體なく、如何にもその大使命に役立つべく認

めたからで、又これを人間の側から云ふ時は、神をしてその大使命を與へしめるに足り、之を親しく神から享けるにこそ應はしとの自信を有したからである。喫煙を禁ずと書くのと、煙草御遠慮と書くのとでは、書く目的は同一であるけれども、目的を達成しやうとする上の心理狀態は同一でなく、即ち他動的に喫煙させまいとするのと、自發的に喫煙を差控させさせやうとするのとの差がある。そして我等本來の民族生命は、喫煙すべからざる場所には煙草御遠慮とさへ書くを要とせぬ超個人的自主の生命である。

第五＝彼等の描いた人類の祖先たるや、元來が禁令を蒙るにしか價せぬ程の低級者だつたので、彼等は忽ちにしてその禁令を破り犯した。之が歐米バイブル國民の云ふ「原罪」なるものであつて、即ち舊約に聯絡する新約の耶蘇教徒等は言ふ「人間は誰でも生れ乍らにして罪がある。萬人の母であるエヴの子なるが爲である。されば總ての人間は、竭きざる焰の地獄に墜ちねばならぬ。然るに慈愛に富み給ふ萬能の神樣は、之を哀れと見そなはして、主イエス・キリストを御遣しになつた。キリストの十字架上に於ける死は、即ち人間をこの罪から救はんが爲である。アーメン」！ 私は曩

に、この原罪觀が今猶ほ其儘、佛教は勿論其他一切の宗教に共通するものゝ如くに言つたが、聊か過言であつた。耶蘇教の坊さんでさへ既に今日では、この原罪說を奉ぜぬ者が多い。だが、それは兎に角として、バイブル民族の源流生命が、エホバ神の與へた掟を破つて、原人犯罪觀を生み出した事と、そして今日のバイブル國民が、よしやその「原罪今人に及ぶ」と云ふ原罪說を放棄したにもせよ、人間の生理的種々なる欲求を以て、生れ乍らにして持つ罪の根、又は罪惡そのものと考へ、斯くて其處に相變らず原罪觀との惡緣を付け、この愚劣なる迷妄思想——低級生命——から脫し得ない事とは、現に我等の同胞すら之に感染し、そしてその直接間接の感染者を世界十七億の人類大部分とする、世界的一大事實である。私が玆に「間接の感染」と云ふのは、新舊の耶蘇教及び猶太教以外、例へば佛教を通して、同じこのバイブル生命に囚はれたのを指すのである。即ち佛教も人間を以て永劫の過去から無限の未來まで、轉々として輪廻の運命を持つ罪惡生死の凡夫なりと說き、此故に御佛に縋がり、阿彌陀樣を稱妙し、救ひを求め又は悟りを開かねばならぬと云ふ。そして之は汎ゆる宗教に共通する處の罪惡論であり、此點に於いて佛教信者としての一部の我が同胞も亦、

その生命が既に或る程度までバイブル民族の生命化されて居るのである。之を歴史的事實に則つて嚴正に言ひ改めれば、本來その原流生命を異にせる日本人の大多數も亦今や、三千年前印度人を通して表現され、其後一千年にして更に猶太人を通して表現された處の、一言にして盡せば人間自身を「罪の子」と觀る低級な思想、愚劣な精神、即ちセム及びハムに發する低劣な民族生命に感染して居るのである。されば言ふ迄もなく此の事實は、その之とは全く異なれる固有生命の持主たる我等日本人に取つての甚だしき墮落であると同時に、斯かる固有生命をこそ求むべくして暗中模索の歴史を綴つて來た世界全人類に取つての絶大なる根本的不幸である。從つて我等日本人の遺憾なき固有生命への復活——全日本人の純日本生命化——は、實に我等日本人自身に取つて眼前臨時的の使命——宣り直しの使命——であると同時に、之が達成を以ての新らしい發足は即ち全世界人類に取つての救主降臨である。基督が再來するので無く、茲に始めて降臨するのである。

だが、今日の我が同胞を見る時、果して何時の日に此事が成され得るか、殆んど全く覺束ない觀がある。從つて私は、之に就いて今少し言はなければならない。それは、その「覺束なし」とする所以の、より以上の説明である。

私は茲に突然ヤソ・キリストを持出す。曾て私は「十字架上の悲鳴者耶蘇」を書いたが、それが新約書に於いて明らかな一面に於けるヤソであつて、しかもその矛盾の多い新約書（特にそのヤソ傳と見るべき謂ゆる四福音書）には又、他の面のヤソが居るので、私はやがて第二のヤソ——悲鳴では無くて「我れ世に勝てり」と言つた凱旋者耶蘇——を書く意嚮を持つて居る。が、其事は兎も角も別個の問題として、茲に私は、新約書に於ける他面のヤソは、例の創世紀に於ける普通のバイブル民族の亞流では無い。之を聊か誇張して云へば、我が高天原生命にも近いヤソである事を、敢て憚り無く斷言する者である。之に就いては前述の如く軈て特に發表する考へであるが、今爰に必要上その一端に觸れなければならない。但し今私には特に之が爲の充分な用意が無いから、例へば謂ふ處の彼の一面を描寫するに就いても、餘り完全では無いかも知れない。

ヤソ曰く「健かなる者は醫藥を求めず、唯だ病める者のみ之を求む」と。處が多くのクリスチヤンは悉く、ヤソのこの言葉、この精神、この生命を體得する事が出來ないで、之とは千萬里の隔たつ

た境地に在つて、しかも耶蘇の弟子だと稱して居る。だが、ヤソの這の宣言は、人類を生れ乍らの病者と觀た舊約創世記を否定したものである。二千年乃至三千年來の、原罪論及び之と多少の緣邊に始終する一切の罪惡觀をば、その高天原生命に髣髴たる程の生命から、超然として否認し去つたものである。叙上の如く、舊約の創世記では、人類を罪の子——從つて病者と見、而してヤソの出現に依つて作られた新約では、ヤソ自身が之を否定して居るにも拘はらず、ヤソを以て只この病者に對する醫師と見、從つてその十字架の死を以て罪の子たる人類の救濟の爲と做すを中心思想として居る。——新舊約全書とはよくも名付けられたる哉！ 斯くて這の新舊約全書のホーリイ・バイブル民族——即ち今ではユダヤ民族を全部の新約からは勿論、舊約の大部分からも放逐し盡して、之をすつかり我がものとして居る西洋諸國民は、玆に新舊一教義としてのバイブルの教なるものが歸する處その眞髓は「人類に對するゴッドの氣まぐれ」に過ぎない事を曝露して、而も此事を心附かないものゝ如くである。故に新約書に於ける一面の理想的ヤソこそ大きな迷惑と云ふべく、彼は全人類に醫藥を要せざる、換言すれば宗教を要せざる、更に極言すれば神を要せざる、即ち罪の子に非ずして神の子、神の分身、神それ自身たる自覺を與へんとした——斯うした別個のヤソの生命はその經典からも見出し得る——にも拘はらず、教會の牧師と信者とは、依然として人間を罪の子、即ち「神の宮」とは反對な「サタンの宮」たる地位に引摺り降して顧みず、寧ろ之をこそ尊きもの、即ち「宗教」と信じて居るのである。（今の我が神道家の多くも耶佛的亞流である。）

覺めよ、一切の低級な外國生命が持つ「教え」即ち「宗教」から！ 世界に於ける極めて少數の日本人我等は、罪の子では無くて義の子、病者では無くて健康體、謂ゆる最高大乘的宗教に於いて云ふ「神に近付き又は合體する」のですら無くて、個々それ自身が神でなくては能はざる一の使命の分擔者、即ち八百萬神々として神業を履行する自己である。（この二三千前年に渉る世界大の迷信から現代人を——現皇國の墮落せる同胞大多數をも入れて——救ふには、猶ほ幾世紀かの歳月と數萬言の言擧げとを費やして、繰返し〳〵その情理に愬えなければならぬであらう。別稿「超宗教乃至無宗教の生命」は、本章及び結論の補足である。就いて精讀あらん事を望む！）

八、謂ゆる原罪論（オリヂナル・シン）又はその罪惡觀の生命に應はしき原人等

第六＝嚴乎として峻烈なるエホバ神の呟ひ付けを蹂躙り、禁斷の樹の實を喰べ、その犯罪意識も明らかなアダムとエヴは、犯罪の直後にも、又は軈てエホバ神の御前に罷出てからも、之が悔悟の色は未塵だも無かつた。そして唯だエホバ神を恐れ避ける心から、只管その面を避けて、生え繁つた樹々の葉蔭に身を匿した。何たる卑怯！　何たる低劣！　何たる醜惡！　この醜惡にして低劣な「卑怯」こそは、人間社會に於ける罪の素、惡の根と云ふべく、さすがに「罪の子」たる意識者の生命を發揮して遺憾が無い。しかも今一つ彼等は、軈てエホバ神に召し出された時、先づ男子たるアダムは神に對して嘘を吐いた。そしてこの「虚僞」は、憎むべき性質を帶びて居た。虚僞にも虚僞者相應の正直を以て行はれる場合もあるが、彼は恰も今日の議會に於ける答辯者の如くに、巧みなる虚僞を敢てした。エホバに「お前は何うしてそんな處に居るか」を問はれて、彼は「裸體だからだ」と答へた。それが巧みなる、從つて憎むべき虚僞である。彼が裸體だから葉蔭に隱れたので無かつた事は、創世記が明らかに物語る處である。あらゆる罪の素、惡の根である「卑怯」は、斯くして最大の惡、無上の罪、そして罪惡の全部である處の「虚僞」を生んだのである。處が玆に猶ほ一つ、アダムに次いでエヴまでが、之も憎むべき「責任轉嫁」をし合つた。罪のなすり合ひを敢てした。アダムはこの女が私に喰べさしたのだと云ひ、エヴは蛇が私を誘惑したのだと云つて、互ひに自分自身の惡事を弱者へ弱者へとなすり付けたのである。事爰に至つては、最早や評すべき言葉も無いと云つてよい。現實的打算主義、物慾的利己主義、掠め貪り爭ふデモクラ生命の根源は其處に存る。我等は唯々その低級さを鮮明に認識する。

然るに我が民族寶典に在つては如何？　我等の祖先達が自分等の大元の祖先として仰ぎ觀た原人イザナギ・イザナミの二柱は、劈頭に於いて先づ天つ神からこの漂へる世界の造り固め完成てふ「使命」を與へられ、斯かる使命を與へられた程であるから當然、他に「してはならぬ」事の禁令など絶對に與へられず、從つて其處には掟なく、掟破り無く、言ひ換へれば「犯罪」又は「罪惡」の原則なく從つて罪惡そのものが無かつた。但し今强ひてこの使命に生くる二柱の動き方に於いて、何かアダ

ム・エヴのそれと比較對照に置くべきものを求むれば、かの子生みの失敗である。然り、違犯となるべき原則なく、絶對に違犯を意味せざる、唯々その實際的成果に於いて自覺せる事業的失敗であつた。言ひ換えれば、使命遂行者それ自身の主觀に「失敗」として映じた客觀的事實、即ち「水蛭子」の誕生であつた。しかも二柱は之に對して何うであつたか？　何よりも先づ、男性がその使命の遂行にいそしむ只管なる心根に、相手たる女性の言先だてを本來ふさはずとする神意の程が閃めき映じ、而も言交しのはづみを受けて受け交した結果が、造り固め事業着手の失敗として現はれたのを見るや、原來が特に遂行上の箇條として何等示されたものが無かつたからとて、敢て彌縫策の不謙遜な態度に陷る事もせねば、又その不出來な出來榮えを強ひて辯解する意嚮も無く、失敗を失敗と感じ、不出來を不出來と認めた素直さの上に、堂々と男らしく天津神の御前に進み出で、その失敗觀の儘に失敗を陣謝し、改めて教を仰ぎ、毫も勞苦を厭はず立戻つて再び着手事業の遣り直しに從事した。かの、殊更に與へられた掟を破り、犯罪の意識も鮮やかなるに拘はらず、その罪を恐るゝに非ずして寧ろ罰を恐るゝ心根から、楡か無花果樹かの葉蔭に身を隱し、やがて裁きの座に引出さ

れては虛僞と責任轉嫁とに努めたアダム夫婦に比して、その差、果して如何ばかりぞ？　天地霄壤の差とは斯かるをこそ言ふべく、我が原流民族生命の如何に氣高く素破しい事よ！

まだある。特に我が女性を見よ！　かのバイブルでは、エヴは手輕に蛇の誘惑に陷つたのみならず、自らその夫アダムを誘惑して共犯者に引き込んだのは勿論、この女性が即ち犯罪の張本者であつた。然るに我が古事記に於ける女性祖イザナミは、我れから言先だての神意上ふさはしからぬ擧にも出で、又これを不良ものとして夫が直感した如く直感する事も出來なかつたが、併し頓て夫から「あれが失敗の因では無からうか」と言はれた時には、即座に感知して之に唱和し得た程の女性である。その迂濶な發言順序轉倒の非も非であり、直感に於いて遲れを取つた點も明らかな見劣りであるけれども、頓て直ちにそれを悟つて唱和し得た事に於いて、其處に前提に於いて一見される缺點は帳消しされて缺點たらず、却つて女らしい女としての女性美を示して餘りあるでは無いか！

即ち、言先立てはそれ自體が非であるけれども、之とて豫め之を非とする何等かの規範が與へられて居たのに據るのでは無くて、今の我等と共に、天津神の御前に出て始めてその非なる事が知られ

たもので、從つて全く何等の「僭越意識」も無く、單なる迂濶から生じたもの――其處が男性に對して當然の女らしさ――であるのみならず、頓てその非を男性の直覺的會得に依つて指摘されるや、直ちにそれを悟り得た其事に於いて、前の迂濶な手落は帳消しとなり、それが直ちに女性美を示して餘りある段階なのである。

九、神と共に生れた我が原人と物品的に前後して造られた彼等

第七＝夫婦としての兩性一體觀に於いて、創世記は我が古事記に比して支離滅裂であり、低級至極である。かの、强ひて人間と他動物との小類似點をのみ探ぐり求めて、その大相違點を無視せんとするそれの如くに、强ひて男女の同質面にのみ着目し沒入して、その大なる異質面を閑却し隱閉する處の、彼等の固有民族性に基く誤まれる惡癖から、謂ゆる「男女同權」の理論を弄び、而してこの「理論」をすら凌ぐ女主男從、女尊男卑の「實際」を築き上げた歐米現代人も、今やその文化の「沒落的本質」に心付き始めたのは必然である。彼等の心ある者は、一面に於いて「東方の光」に觸れたのみならず、他面この光に照らして見てバイブル記事そのものゝ矛盾低級を認めたからである。私が本稿第一章に於げるバイブル記事拔萃の處で、創世記第二章の終り二節を「餘事」として省略したのは、即ち爰に云ふ問題の記事である。それは、エホバ神が女を作つて之を男の許に連れて來たと云ふ記事の續きで、邦譯文には「アダム曰ひけるは、之こそ我が骨の骨、肉の肉なれ。之は男より取りたる者なれは之を女と名付くべしと。此故に人はその父母を離れてその妻に好合ひ、二人は一體となるべし。」とあるけれども、英譯よりは不完全である。即ち英譯書に曰く(23) "Adam said, This is now bone of my bones, and flesh of my flesh; she shall be called woman, because she was taken out of man. (24) Therefore shall a man leave his father and his mother, and shall cleave unto his wife; and they shall be one flesh." と。其處に「男」を「人」と譯したのや、又はワン・フレッシを一體と譯したなど、之を私は不完全と云ふ。併し私が今爰に述べやうとする趣旨は、英譯對和譯の詮議では無くて、その「夫婦同地位」觀の由來する原文そのものに就いてである。之を手ッ取り早く言へば、その男女同地位觀の思想が、既揭三章に涉る創世記の一般表現に對

して、甚だしい矛盾を含み、且つ頗る低級なのである。即ち、この取つて付けた様な、そして淺薄な小理屈文句を除いては、創世記の要所に於いてメンタルにもヒジカルにも、男女同地位論の根據は無いのである。

先づ造られたのも男である。先づ樂園に置かれたのも男である。先づ禁斷の掟を與へられたのも男である。女が神の禁令を云々して蛇に答へたのは、察する處その禁令を男から又傳へに傳へられたに因る。凡て男が先であり、且つ唯だ男一人である。やがて男の肋骨を取つて女が造られ、玆に始めてバイブル記者は、アダムをして彼女をエヴと呼ばしめ、且つ我が骨の骨、肉の肉なれと感嘆せしめ、更に man から取つて造られたのだからとて之を woman と名づけしめ、之に附け加へて記者自身の、謂ゆる「男女一體說」の起源的斷定を試みたのであつて、創世記の本當の筋は、男女同地位では無くて、男主女從であり、男尊女卑であらねばならぬ。然るにこの如何にも取つて附けた樣な——恐らく之も後人の附加である——小理屈文句の爲に、謂ゆる「聖書」本筋の精神をいつしか無視して、それとは反對な今日の女主男從、女尊男卑たる實社會を築き上げるに至つた。惟ふに之はその取つて附けた樣なと形容される後段の小理屈文句にのみ由來するのでは無くて、その本來從的地位に在り乍ら——恰かも蛇が人間の下位に在り乍ら彼女を誘惑したやうに——エヴが易しく蛇の誘惑に陷つて、夫アダムに一言の相談も無しに禁斷の樹の實を喰ひ、更に夫をして易しく共犯者たらしめた處の、そうした出裟娑りの事實にも亦、大に基因するのであらう。そしてそれは、美はしき夫唱婦隨とは反對の醜き婦唱夫隨である。

翻つて、我が「古事記」に於ける夫婦觀は、ヒジカルにもメンタルにも、眞に「一體にして同地位」である。此事を端的に明白に示して居るのは、些の矛盾も無く、餘分な道草も無く、卒直に書かれたその純朴な古典記事に於いて、天津神が諸々の命もちてこの漂へる世界を造り固め成せと云ふ大なる使命をば、イザナギ・イザナミの夫婦に對して與へられたと云ふ處にある。即ち男性一人の使命として與へられたのでは無くて、夫婦共同の使命として與へられたのである。この一事だけで他に何等の列擧も必要とせぬけれども、數へ擧げれば猶ほ二三ある。即ち二柱が——順序は男性の方先きなれど——共に「成りませる」事、是れ其一であり、又この二柱が双互の間に何等の矛盾も生ぜ

ずに、共に偕にその共同使命の遂行に着手された事、是れ其二である。見よ、男の骨で女が造られたと云ふ――一見これこそ謂ゆる同體の原理らしくて、實は肉體觀だけの低級な――それとは全く違つて、共に偕に神の間から、同じく神として「成りました」上に、夫婦一體として共同の使命を與へられ、そしてその使命を共同に遂行すべく着手したのであつて、その一身同體は、肉體的にも超然として嵩高であるのみならず、アダム・エヴには全然缺如した處の、精神的一身同體の原理が確立して居るでは無いか！

そこで我が這の原理そのものは、唯だ之にのみ卽して解決しやうとする人々に取つて、日本は、「單なる兩性同地位」を本來とするもの――勿論それは創世記に於ける原人夫婦以上のものではあるが――であつて、其處には決してお前が先程暗示した樣な、謂ゆる「夫唱婦隨」と云ふ樣な、原理は無く、寧ろ明白にそれを否定する處のものでは無いかと云ふ、問題を提起する事になるかも知れぬが、それは淺見である。この男女(夫婦)同地位の原理は、使命を擔ふ責任の同地位原理であつて、この共に擔ふ責任の使命遂行に於ける倫理的同格の原理では無い。即ち、その責任的本質は男女同地位であるけれども、この責任的本質を使命遂行てふ實際上の事實に具現して行く場合、其處に男主女從――男尊女卑と云ふそれには甚だしく語弊があつて、我等には當嵌まらない。故に先づ適當な用語としての一つ、卽ち男主女從――の道程――倫理――が發生するのである。前揭拔萃の通りそれは失敗としての水蛭子誕生の後、それより前既に之を先見した男性の直覺を天津神に裏書されて、玆に始めて確立された倫理的原則である。そして又それは、責任上同地位本質の男女が、男女として既に二者であるのに、扨この兩者が使命遂行上、實際に事を處理する場合に、二者その執れかゞ決裁し斷行する立場に在らねばならぬので、この實際的必要から生じた處のものである。斯くてその結果は、肉體的にも精神的にも、謂ゆるアクチーヴな男性が主位に立つて、パッセーヴな女性は從位に坐する事――故に女言先立つるは良はずとする原則――が確立したのである。五大人最後の一人、大國隆正翁の歌に「君と親、女は夫、一筋に、本と定めて、心散らすな」と云ふのがある。卽ち、實際生活上の道、倫理としての「本末」は、君民間に在り、父子間に在り、長幼間に在り、夫婦間に在る。この精神的及び肉體的自然の差別原則と、之に基く實際生活上の必要條件とが、その

使命責任上の同地位本質に卽して、別に使命遂行上の本末資格別を指定する。斯くして玆に、世界無二なる男女同地位の責任原理と、そして又等しく世界無二なる男女本末別の實踐原理とを有し、從つてこの兩原理を同一に具備する事に於いて又更に世界無二なる民族生命が表現された。卽ち我が「古事記」は、神に造られたのでは無くて、神の間から神として共に成り出た男女が、夫婦として天津神から共同に世界創造及び完成の使命を與へられ、この大原則に於いて兩者は、謂ゆる男尊女卑に非ず、女尊男卑に非ず、共に偕に「尊」であり「命」であるイザナギ・イザナミであると同時に、この「使命」を果して行く實生活の上に於いて、女言先立つるは良はずとする別の實踐原理が與へられ、斯くて皇國民の我等男女は、謂ゆる「夫唱婦隨」に於いて大使命を果し行く、共同責任者である事を謳つて居るのである。偉なる哉、古事記！　大なる哉、日本精神！

明治天皇の御製＝「女」

なよ竹は、すなほならなむ、うつせみの、世にぬけいでむ、力ありとも

昭憲皇太后の御歌＝「紫式部」

露ふかき、みかきの內に、咲きながら、操たはまぬ、をみなへしかな

歐米諸國民の奉ずるバイブル敎では、男女はたとひ神の手で造られ、神の息を吹き込まれたとは言へ、同じ物質材料から造られたと云ふ點で、肉體的には一身同體――それも我が高天原の共に「神成りませる」それよりは意義頗る低級――であつて、而も精神的には別身非同體――を理論づけしめるその人類創造物語が、其處に先づ男が最初に造られ、やがて女がその肋骨を取つて後に造られたと云ふ、二次的理論づけを生む物語で、それに據る當然の別身非同體――である。卽ち精神的には、一身同體たるべき何等積極的――恰も我が高天原記錄に於けるが如き――根據なく、夫婦は赤の他人であり、唯だ肉體的に「我が骨の骨、我が肉の肉なれ」と、特に男性をして叫ばしめる處の、男性中心の同骨一肉體である。然るにそれにも拘はらず、現代歐米の現實は、淺薄な「男女同權」を通り越してモツト淺薄な女主男從、女出娑婆りの天下である。（餘事ながら、米人レスター・ウォードの社會學は、女性中心說を有するので有名である。この女性中心說は、勿論肉體論であるから、我が高天原記錄は之に對して超然たるものであるが、肉體的男性中心觀のバイブル思想は一溜りも

無く退けられて了はねばならぬ。又、我が古典が超然たる裡に猶ほ兩性の前期に於ける中性を諷する處、此點でも更に價値に富むでは無いか！）

十、その神が神らしからず、而してその人間が甚だしく劣等

第八＝最後に擧げやうとする事、之は別に一般的批評で取扱ふべき性質を有するが、又自らこの特殊批判の範圍にも屬するので、之を玆に簡單に述べやうと思ふ。それは何であるか？　即ち、神の手で神の像に似せて造られて、先づ神にエテンの樂園に優遇された彼等が、やがてその掟を破つた結果、同じエホバの神の怒りを蒙り、忽ち罪の宣告を受け、その刑罰の具體的執行として、エデンの樂園から放逐された事、これが第一。そして彼等を放逐した神が、園の東の方にケルビムと焰の劍とを置き、殘る生命の樹への道を遮斷した事、これが第二。それから、智慧の樹の實を喰べれば其日に死ぬるぞと言つたが、アダム・エヴは之を喰べても死せず、エホバ神に虚言があつた事、これが第三である。

是等は總べて、神そのものゝ問題だと云へる。換言すれば、バイブル民族が描いた神の思想の問題である。神の思想の問題としては、創世記の書き出しの抑々からであるけれども、それこそは一般的批評の際に讓つて、私は今唯、神人交渉開始の幕の閉ぢられる場面としての、この一齣に就いて丈、特に必要と思はれるので取扱ふのである。

罪の子となる樣な人間を造つたエホバ神、そう云ふ神を描いたバイブル民族！　そんな神も人間も我が「古事記」では見られない。掟を破つた彼等の所罰はいゝとしても、例の喰べれば神の如く聰明になると云ふ智慧の實や、同じく神の如く永遠生命（エターナルライフ）を得ると云ふ生命の實を、何等の顧き得る理由も無しに惜んで與へず、殊に殘る生命の實を改めて嚴重に守る神！　そんな小道德の神や、かうした神を描いた人間は、我等の古典には居ない。喰べれば死ぬるぞと嘘を吐いた神、嘘を吐く樣な神を神とする人間、そんなものは我が民族祖先の傳へた我等の固有思想には全く見られない低級存在である。

舊約書との切つても切れない聯絡から意義を有して存在する新約書の信者、即ちクリスチャンは

哀れにも自己滿足の詭辯を弄して言ふ――「舊約に於いて既に智慧の實は喰べたが未だ生命の實は喰べず、從つて永遠生命を持たなかつた我等も、新約の血、即ちイエス・キリストに依つてその永遠生命が得られる事になつたのだ」と。尤も之は、新約書に於ける信仰思想でもある。但し新約書とは云つても、其中の特にパウロに依つて生み出された信仰思想として、彼及び他の使徒等の書の傳ふる處である。ヤソも「我れを信ずる者は永遠生命を得む」と言つたとあるが、それは四書あるヤソ傳中の特にヨハネの記す處で、他のマタイ、マカ、ルカには記されて無い(と記憶する)。そこで之を信仰詭辯として退ける處の、例の「自然を征服」したり又は「形式論理」の信者であつたりする連中は、單なる一篇の詩と解しての創世記の、その生命の實の禁斷の向ふを張つて、改めて「生命の實を食はねばならぬ」と云ふ、新らしい詩を盛んに作つた。それは、何と言つても彼等歐米諸民族の頭上には、謂ゆる「世界一の大文學」バイブルが光つて居り、それが唯一の賴りであるが、しかも之に從へば自分等の「生命の所有」があやぶまれる――蓋し後の新約はあつても、前の舊約が兎角優先權を以て口を所く――ので、その心細さから脱せんとする彼等の、哀れ眞面目な、而も彌縫的徒

勞に屬する、觀念的努力たるに外ならない。

ヤソは「我れ舊約を活かす」と言ひ、且つ「神は愛なり」と言つた事もあるが、舊約書現實の神は、その各卷を通じて見る如く、怒りの神、嫉みの神、無慈悲の神、人間としても怪しい嘘吐きの神、失敗の神である。見よ、そのエホバの神は、後にその創造を悔え、即ち之を失敗の創造として自分も感じ、人類を始め一切の生物を殘らず――但しノアの一族とその擇べる生物を除いて――滅ぼした程、それほどおかしな神で、その嘘言の如きも猶ほ他の場合にもあつたが、兎にも角にもバイブル民族は、自分等が神にその像に象つて造られたと云ふよりは、彼等が自分等の像に象つて神を造り上げたものであつて、此點既に我が古典內容とは大に異なり、即ち大にその特に擬人主義に於ける低級性を曝露するものである。

擬人主義！　これは現代人の未だ猶ほ遂に脱し得ざる處――そして之が「宗教」を求める低級人類の迷妄的根底と相即する末進化弊根で――古代人に在つてのそれは寧ろ當然とすべく、我等の祖先も亦若干之を免かれなかつたが、扨この擬人思想を比較批判する時に、其處に恰も雲泥の差あるを

見る。一言にして盡せば、我が祖先達に於ける擬人主義は、之が前提として先づその擬する人間自身の神格的高級性を持つて居る。即ち高天原民族はバイブル民族とは反對に、先づ神に象つて自分等を造つて置き、やがて之を擬して神を描いたものである。されば我が神話古典には、彼れの如き低級な擬人主義に基ける、叙上の如き低級あやしげな表現が無い。舊友石川三四郎君は、其著「古事記神話の新研究」に於いて、次の如く言つて居る。「古事記の殊に神代記には、それがヘブリュウの傳說神話の如き道德的批判や宗教的偏見を以て書かれなかつた爲に、却つて多大の人間味、粗朴なる原始生活味が溢れて居る」云々。バイブルが古事記とは違つて、そうした偏見や批判（この批判云々も實は、俗に色眼鏡で彼れ是れするの意味で、要するに宗教的偏見と相棒の道德的偏見を云ふ）に富むのは、取りも直さずバイブル民族が既に先天的に、そうした低級な宗教的及び道德的偏見に富めり、低級民族である事を示すものである。

又、石川君の眼に映じた我が古事記に於ける「人間味」又は「原始生活味」は、實は石川君（拜歐思想を脫せざる）には未開墾の我が「超宗教又は無宗教的」生命の表現そのものなのである。單なる「人

間味」なら、捉を破つた彼等にこそ見られ、單なる「原始生活味」なら、裸體の人間に蛇をあしらつた創世記にこそ在る。我が古事記に於いて見る處は、單なる人間味とか原始生活味とかの、そんなものでは無い。眞に囚はれざる者の透明な眼に映ずるその眞相は、實に世の謂ゆる「宗教」即ち駄宗教の的ならざる神――トランセンデンタル・ゴッドでなく、我々人間の祖先を神としての神である。その神――と、この神から發生した類神人乃至類人神の神々しさ、及び是等の神と類神人乃至類人神とに依りて營まれたる神代生活味そのものである。

結論――駄宗教以下の彼等と優秀宗教をさへ超越する我等

以上八項目に分けて比較批判を試みたが、之を要するに彼我兩古典の示す處は、彼れの「宗教民族」に對する我れの「超宗教乃至無宗教民族」の、劣對優の源流生命である。彼れの低級、我れの高級は、全人類の世界的迷信、即ち律するに同じく宗教範疇の、例へば大乘的小乘的と云ふが如き、量の差では無くて、宗教に對する非宗教の、眞に質の差に在る。

私は今、全人類の世界的迷信と言つた。然り、尊きものは宗教なりと做し、宗教を離れて尊きものを見る能はざる、是れ近代世界の全人類的迷信である。然るに、這の世界の一隅には、宗教を超越するが故に始めて尊き生命を固有せる民族が、獨りその生命を若干の混入不純分子と共に表現せる古典に秘藏して存在し、且つ微か乍ら之を底力として三千年歴史の現實に國體原理を體現し、以て家族體獨特の國家生活を構成し持續して來たのである。

本來の猶太人を押除けて專らバイブルを支持して居る歐米諸國民は、ヱホバの前にひれ伏す事を以て至上とし、たゞ〳〵之に始終して生活する。

高天原民族は、天之御中主神の前にひれ伏す事のかはりに、現實神　天皇に畏み齋きまつり、その畏み齋きまつる事を實質行事とし、以て熾烈なる　尊皇心に生活し、只管なる使命遂行（即ち世界の造り固め完成の使命遂行）にいそしみて生活する。

―完―

遠藤友四郎著

日本思想＝創刊滿八週年
錦旗會＝創立滿六週年　紀念

マルクス
レーニン
國家論及び革命論の墓

定價五十錢

錦旗會本部發行

露光量違いの為重複撮影

新刊

超宗教國體論 天皇信仰

錦旗會總指導
日本思想主筆

遠藤友四郎著

四六版ラフ函入
純白地赤入美裝

定價二圓 送料十四錢

敬虔なる著者の勤皇精神に我等は嚴肅に襟を正す。然も著者の勤皇思想たるや最急進の最先に立つ。現存の謂ゆる日本主義、皇室中心主義を粉碎する處に我等は驚異し且つ歡呼する。その只管なる「天皇信仰」と熾烈なる「皇民意識」及び「改革精神」を絶叫して已まざる處は、謂ゆる左翼不逞群は固より特權階級者にも強大にして新たなる恐怖を與へるであらう。

東京市本郷區駒込上富士前町一〇九番地 先進社

新刊
超宗教
國體論
大日本帝國

昭和八年四月下旬印刷
昭和八年五月三日發行

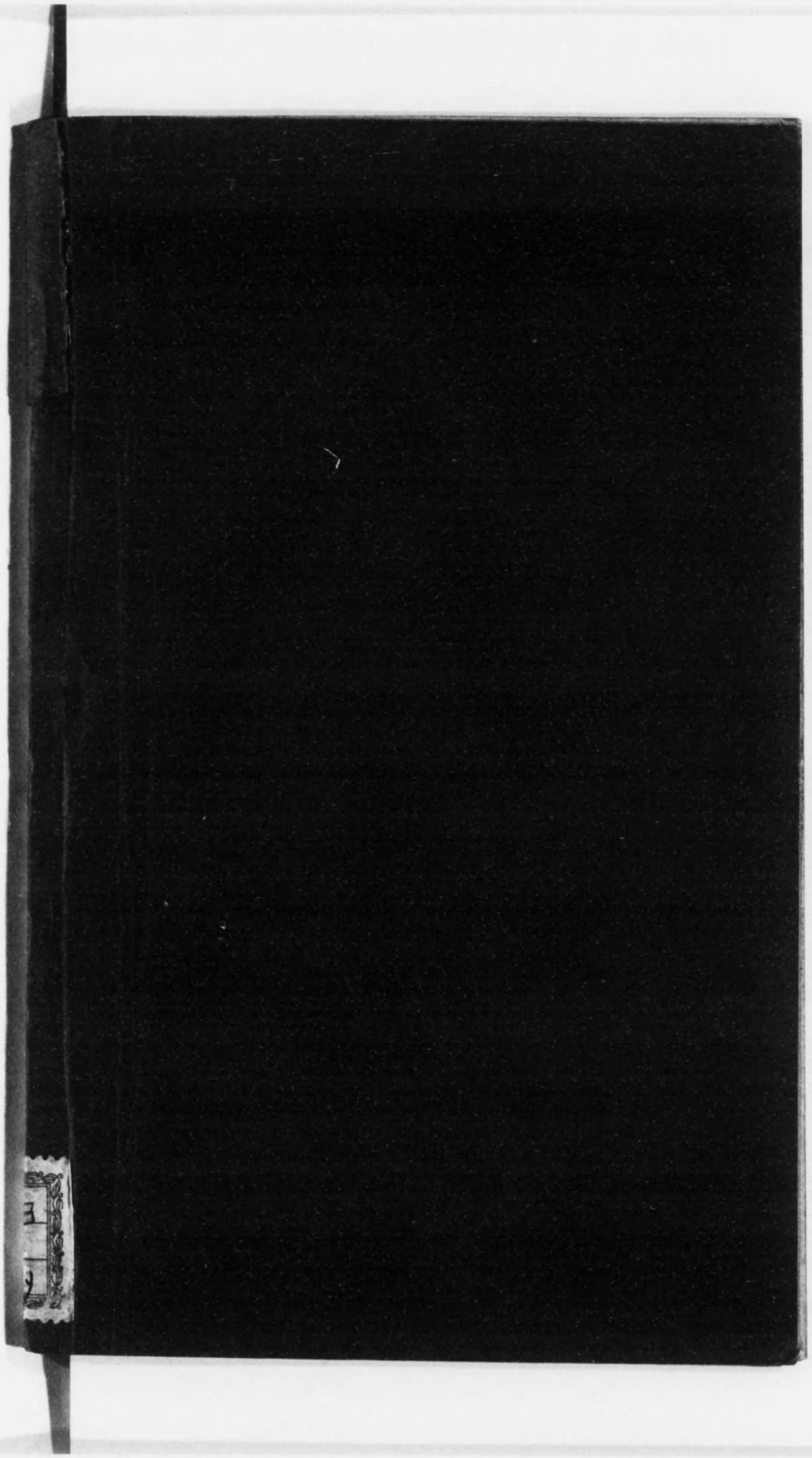
定價廿錢
十部以上一割引
五十部以上二割引
百部以上二割半引

著作者 東京市牛込區喜久井町三十四番地 遠藤友四郎
東京市牛込區喜久井町三十四番地

發行者 東京市牛込區喜久井町三十四番地 遠藤繁野

印刷者 東京市牛込區鶴巻町四百〇五番地 高橋丹治

我が民族生命の本質
不許複製
錦旗會本部藏版

發行所
大正十四年創刊
日本思想發行所
月刊
錦旗會本部
東京市牛込區喜久井町三十四番地
振替口座東京七二四九〇番

終